



# 若山牧水

## 旅と自然を愛した歌人

マンガ

宮崎県郷土先覚者シリーズ⑤

マンガ／太神美香

ふんわり  
…  
尾鈴の  
やまの  
かなしさよ  
ほんとは驚は  
いい歌を詠む  
真剣に文学の  
道を志せば…  
原白  
はじめとする  
友らとの  
会いた  
開先  
東北各県  
講義 依頼が  
来  
この後  
牧水は  
あなたの

マンガ宮崎県郷土先覚者シリーズ⑤ 旅と自然を愛した歌人 若山牧水

令和5年3月 発行

発行／宮崎県

〒880-8501 宮崎県宮崎市橘通東2丁目10番1号  
宮崎県 総合政策部 みやざき文化振興課  
TEL : 0985-26-7099 FAX : 0985-32-0111

協力／日向市東郷町 若山牧水記念文学館

マンガ／太神美香

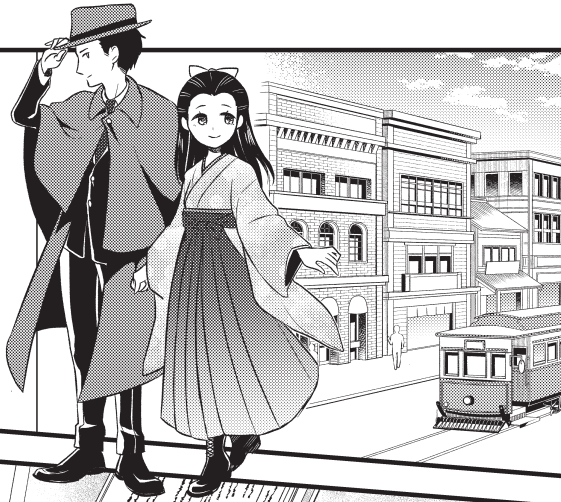
制作／(株)梓書院

〒812-0044 福岡県福岡市博多区千代3丁目2番1号  
TEL : 092-643-7075 FAX : 092-643-7095

大正時代  
たいしやうじだい

十五年間と  
短かったが  
じゅうごねんかん  
みじか

実に多様な  
文化が開いた  
時代でもあった  
じつにたやうな  
ぶんかが開いた  
じだいでもあった

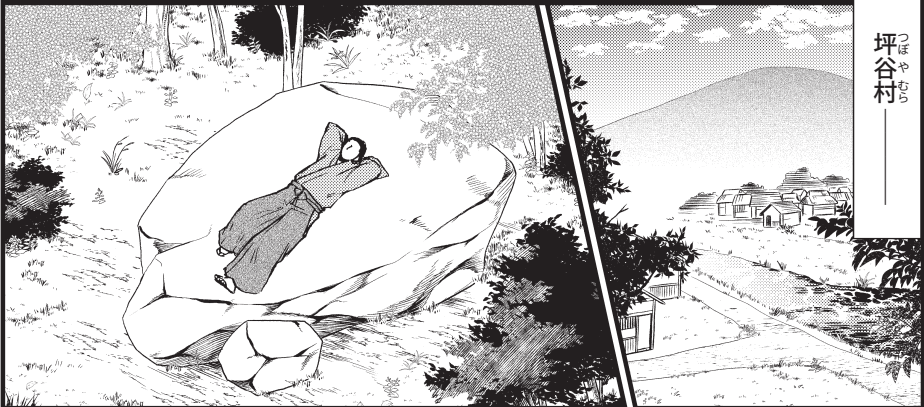


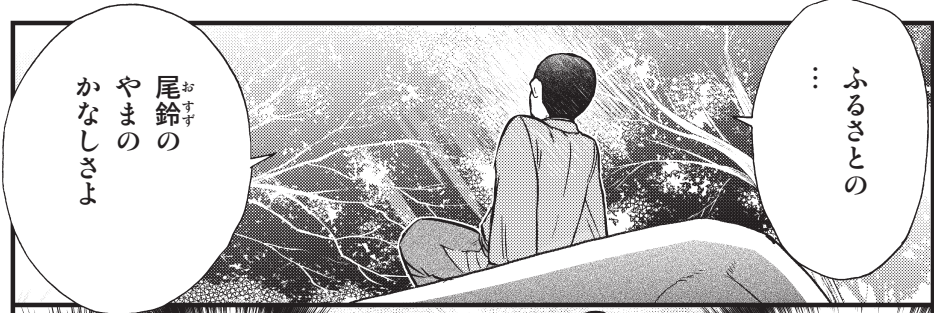
そんな華々しい  
文化の中心で  
国民の心を  
惹きつけて  
やまなかったのが  
そんなはなはなしい  
ぶんかのちゆうしん  
こくたんのこころを  
ひきつけて  
やまなかったのが

「文学」である  
「ぶんがく」である



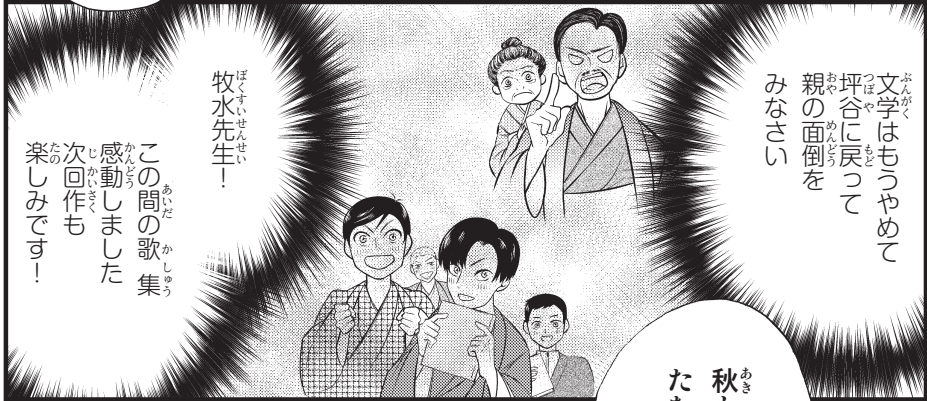
坪谷村  
つぼやむら





ふるさとの  
…

尾鈴の  
やまの  
かなしさよ



文学はもつやめて  
坪谷に戻って  
親の面倒を  
みなさい

牧水先生！

この間の歌集  
感動しました  
次回作も  
楽しみです！

秋もかすみの  
たなびきており

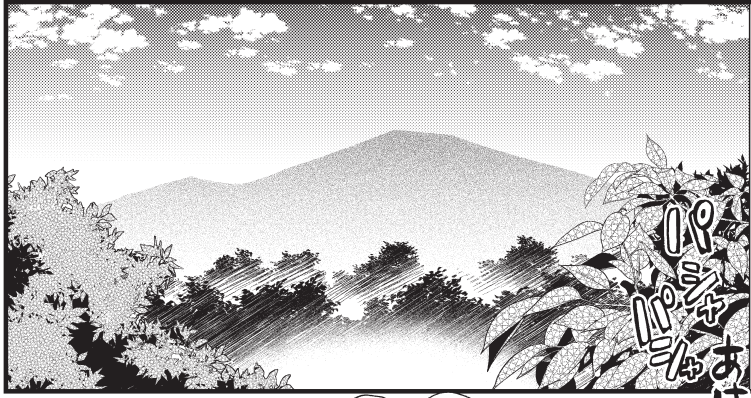


これは  
建てられた歌碑の数では  
圧倒的日本人を誇り  
今なお日本中で  
愛され続けている

旅と酒・自然を愛した  
宮崎県日向市出身の  
国民的歌人

「若山牧水」の物語



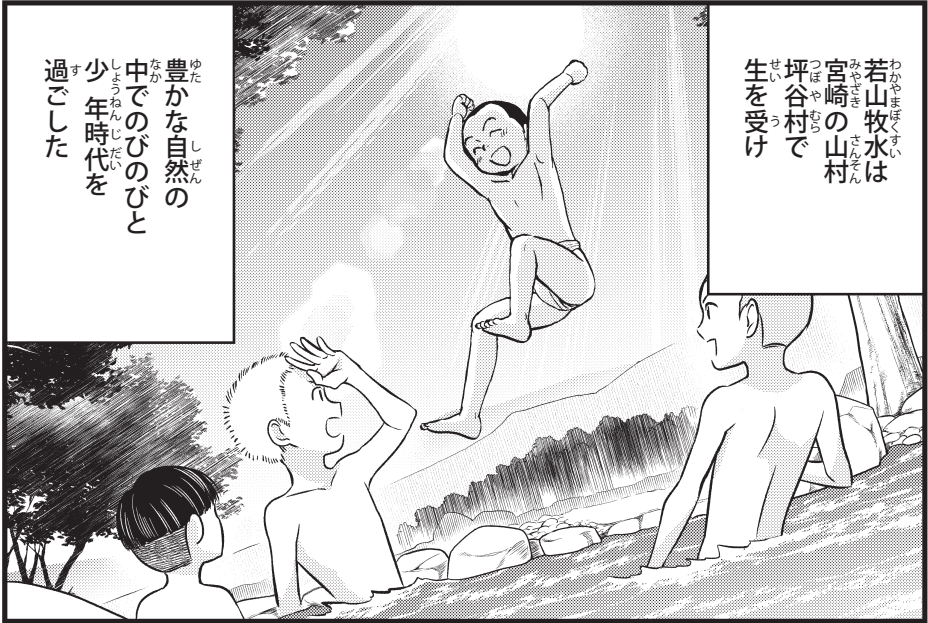


ひがししほきげん とうはくぐん へいやちり  
 東白杵郡坪谷村  
 (現・日向市東郷町)



若山牧水は  
宮崎の山村  
坪谷村で  
生を受け

豊かな自然の  
中でのびのびと  
少年時代を  
過ごした



「繁」という名は  
文学好きなの  
姉たちが

この子は  
玄虎じい!

当時  
愛読していた  
新聞小説の  
主人公の名を  
ヒントに付けた  
ものである



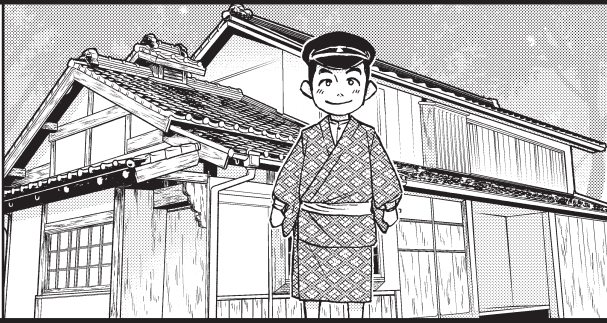
長姉 スエ

次姉 トモ



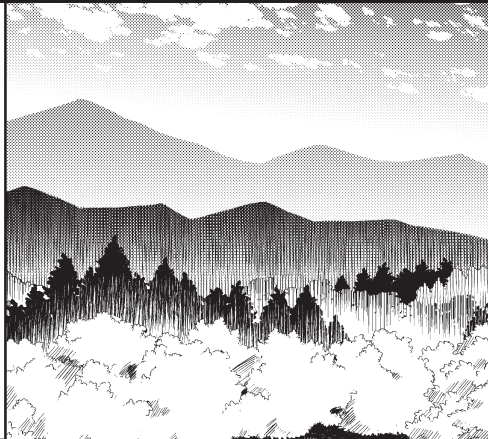
「葉山志計留」  
からいただきましょ!

牧水が幼年時代を  
すごした  
坪谷村は



山と山との間に  
挟まれた細長い  
峡谷にあった

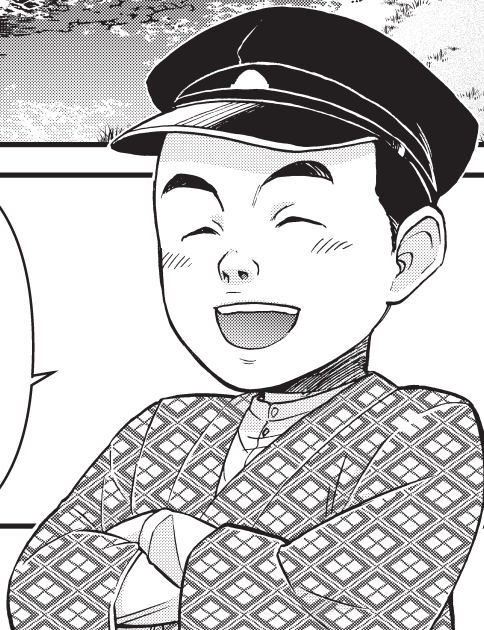
牧水の生家は  
医者の祖父・健海が  
建てたものであり



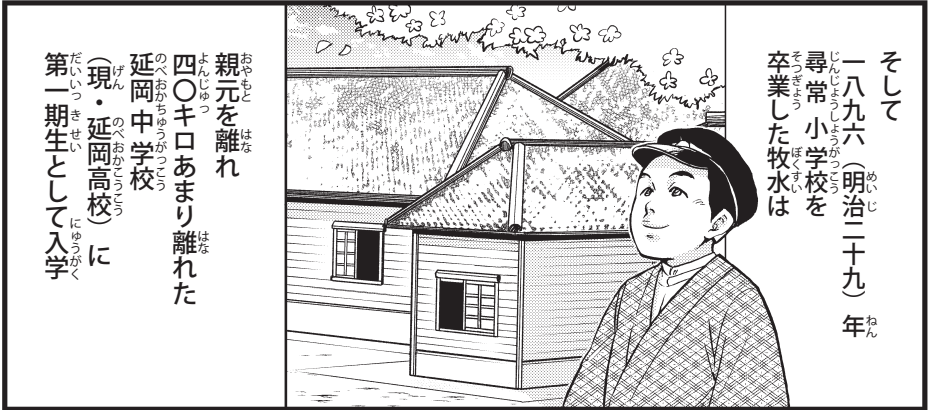
眼前に流れる  
坪谷川とその向こうに  
そびえる尾鈴山の  
険しい断崖を見渡せる  
この景色を



牧水は  
たいそう  
気に入っていた

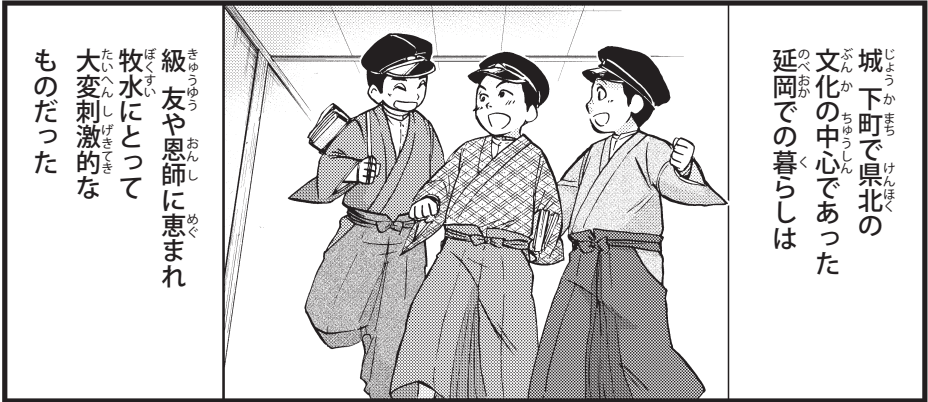


やっぱりここが  
このあたりで  
一番景色がいいや！



そして  
一八九六（明治二十九）年  
尋常小学校を  
卒業した牧水は

親元を離れ  
四〇キロあまり離れた  
延岡中学校  
（現・延岡高校）に  
第一期生として入学



城下町で県北の  
文化の中心であった  
延岡での暮らしは

級友や恩師に恵まれ  
牧水にとって  
大変刺激的な  
ものだった



「かくれたる

延岡中学校校長  
山崎 庚午太郎

徳を行ひ  
頭れぬ  
人は深山の  
桜なりけり』……



ひとし  
人知れず  
徳をつむ人を  
山奥の桜に  
例えるとは…

なんという  
感性だ…！

ぼくすい  
牧水は  
十五歳のとき  
はじめて  
短歌や俳句などを  
発表

その後も  
友人や熱心な  
教師たちに恵まれ  
その才能を  
育んでいった



おい!  
また繁の歌が  
載ってるぞ

おおーっ!!

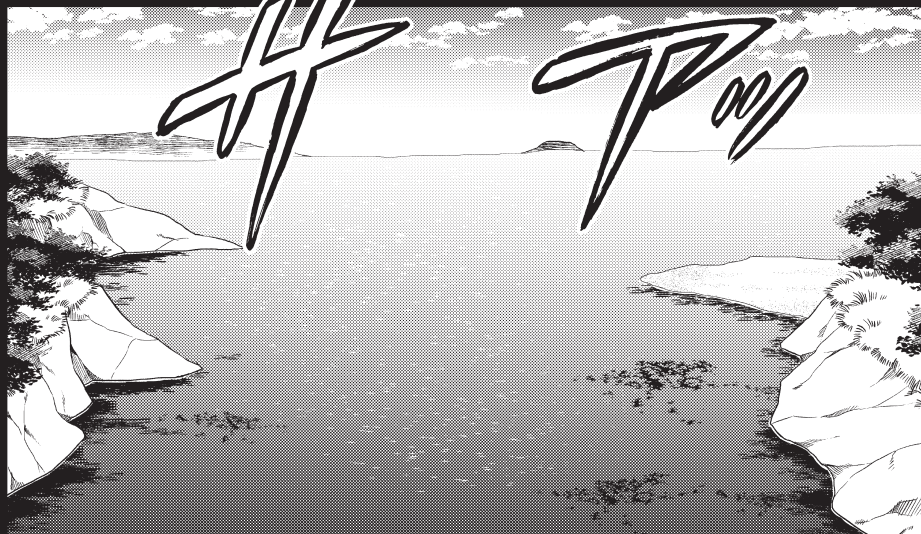
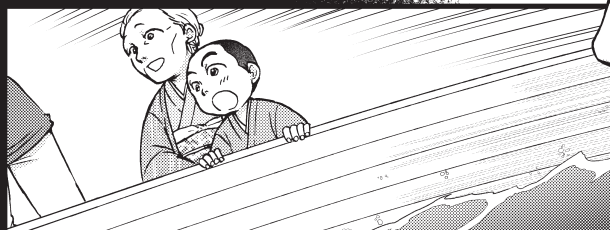
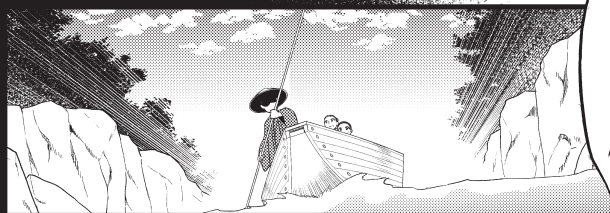


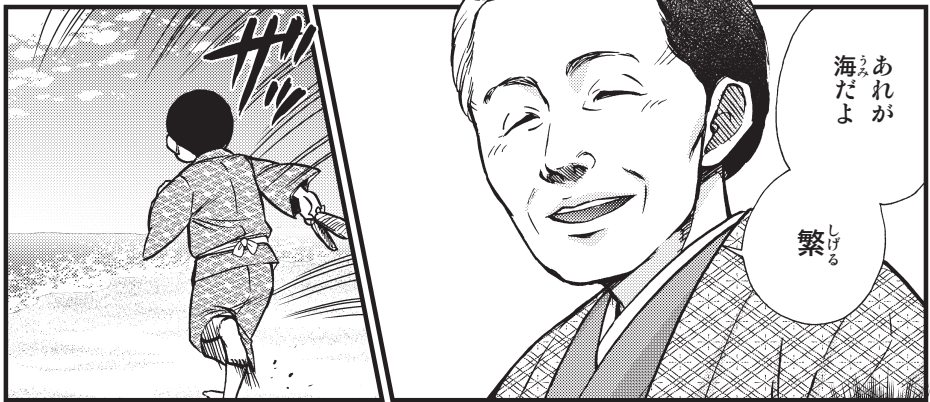
ほんとうに繁は  
いい歌を詠む  
真剣に文学の  
道を志せば…

日本中に  
名を轟かす  
歌人になれる  
かもしれんぞ!



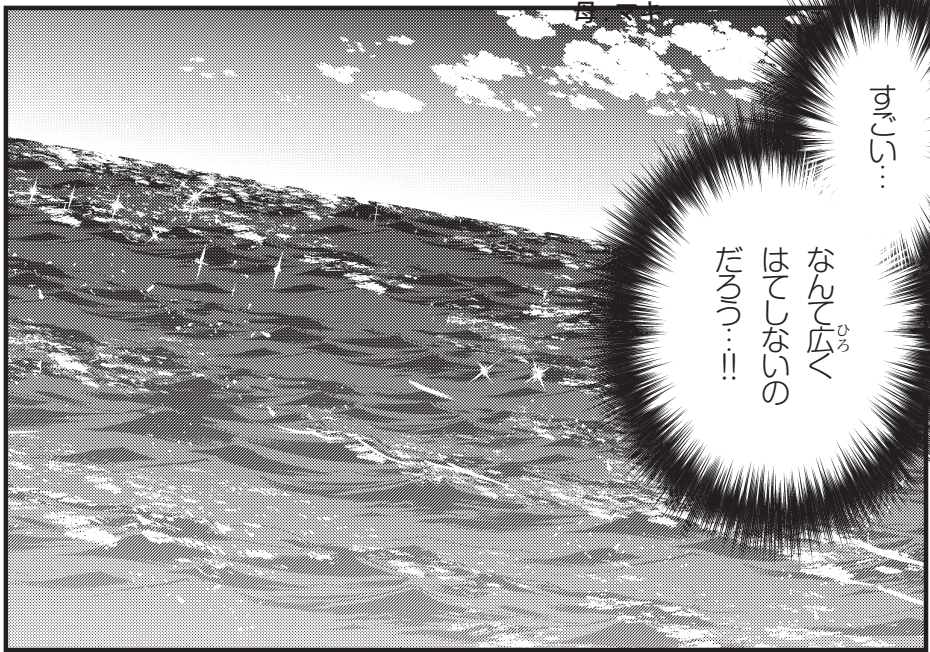
ぶんがく  
「又学」か……





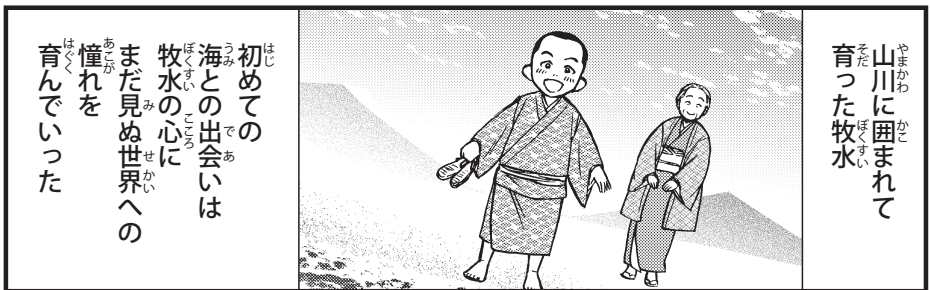
あれが  
海だよ

繁しげる



わーん…

なんてひろく  
はてしないの  
だろっ…!!



山川やまかわにかたじけなく囲まれて  
育そだったほほすい牧水

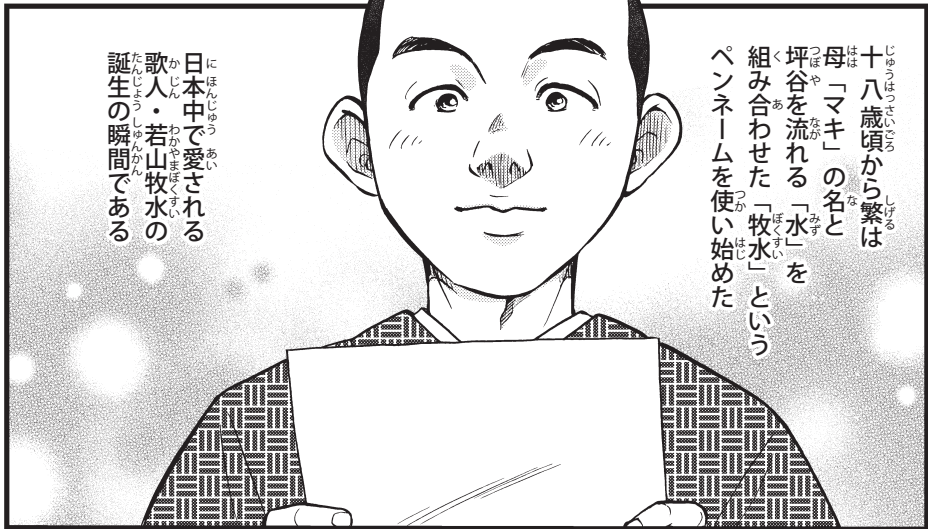
初めての  
海との出会いは  
牧水の心に入  
り込んでいった  
憧れを



：そつだ：  
 僕はあの海の  
 むこうを  
 見てみたい

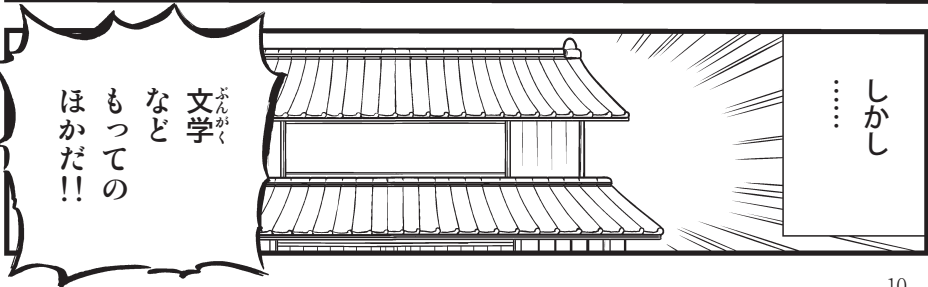
そして  
 そこで見た  
 ものを歌にして  
 みんなに  
 皆に伝えたい!!

牧水



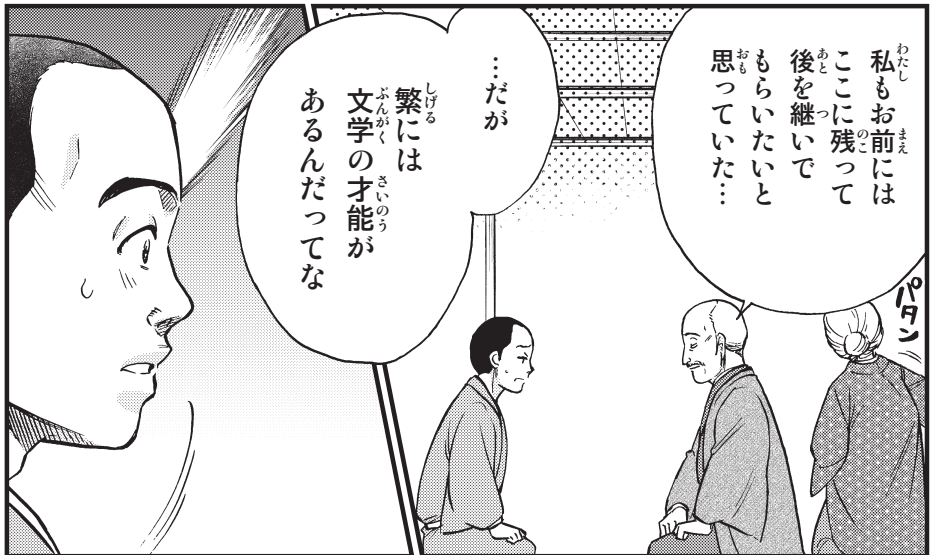
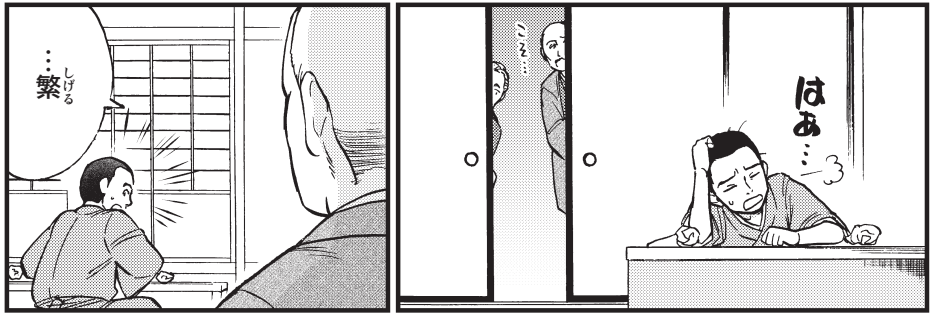
十八歳頃から繁は  
 母「マキ」の名と  
 坪谷を流れる「水」を  
 組み合わせた「牧水」という  
 ペンネームを使い始めた

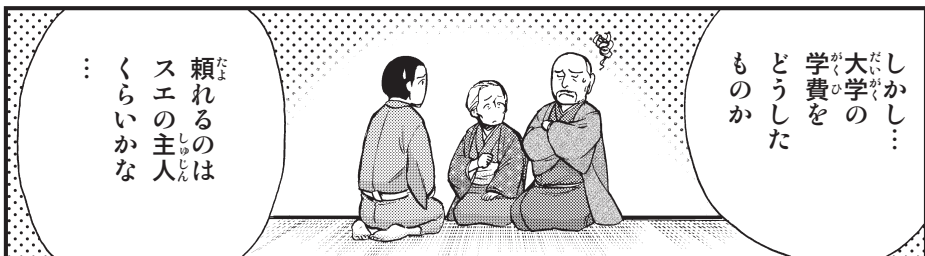
日本中で愛される  
 歌人・若山牧水の  
 誕生の瞬間である



しかし  
 ……

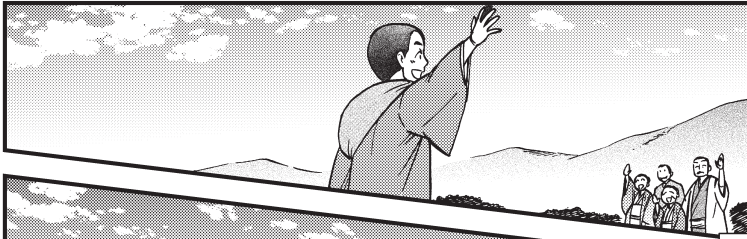
文学  
 など  
 もつての  
 ほかだ!!





そして

一九〇四  
(明治三七) 年



晴れて東京の  
早稲田大学に  
入学した牧水は

北原白秋を  
はじめとする  
学友らとの  
出会いと交流のなかで  
その才能を  
さらに開花させて  
いった



時は流れて  
一九一〇  
(明治四三) 年

「幾山河  
越えさり行かば  
寂しさの  
終てなむ  
国ぞ  
今日も  
旅ゆく」:



大学を卒業した  
牧水は

新聞社の仕事を  
経て出版した  
第三歌集『別離』が  
好評を博し

うん  
やはり  
牧水は  
面白い深い!

あぁ!  
新作ですか

一躍人気歌人の  
仲間入りを  
果たす

上京当時は  
与謝野晶子など  
ロマンチックで  
空想的な歌人が



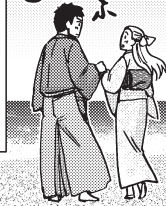
文壇の主流  
であったが



みずみずしい  
青春の恋歌と  
素朴な自然への  
愛を写実的に詠む  
牧水の歌は

白鳥は哀しからずや  
空の青 海の色にも  
染まらずたよふ

ともすれば  
君つ無しになりたまふ  
海は眺めそ  
海にとうれむ



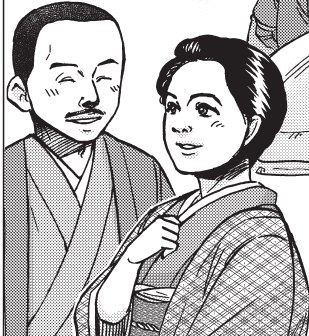
若い人たちを  
中心に多くの  
共感を得て  
文壇に新たな風を  
吹きこむこととなった

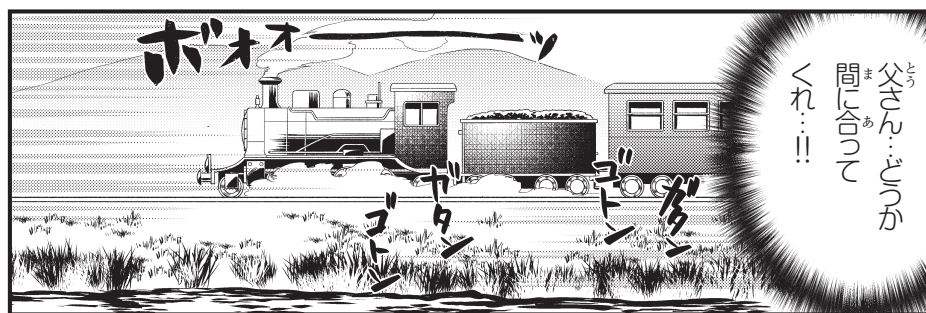
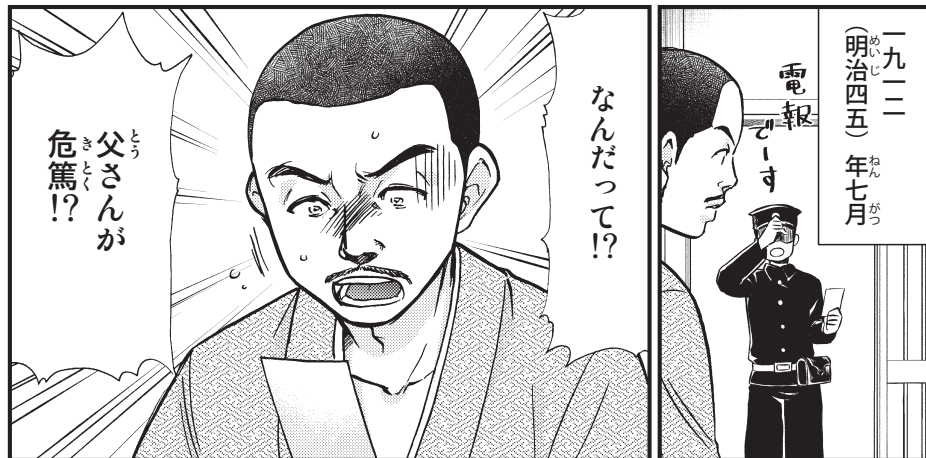
燃えるような  
恋愛や失恋

友人・石川啄木の  
死などを乗り越え

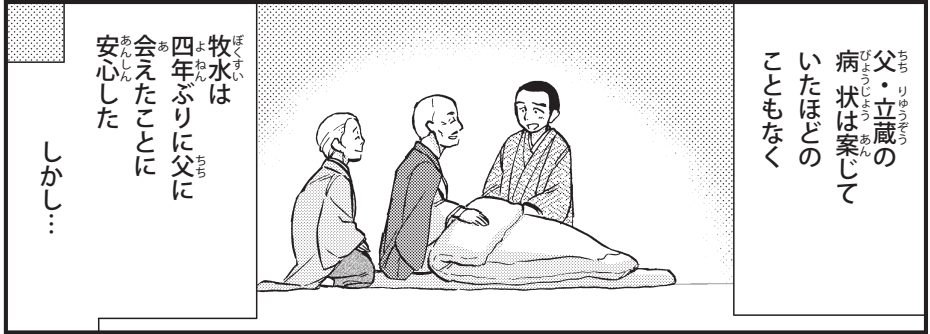


歌人・太田喜志子と  
結婚し今まさに  
絶頂期を迎えよう  
としていた矢先――





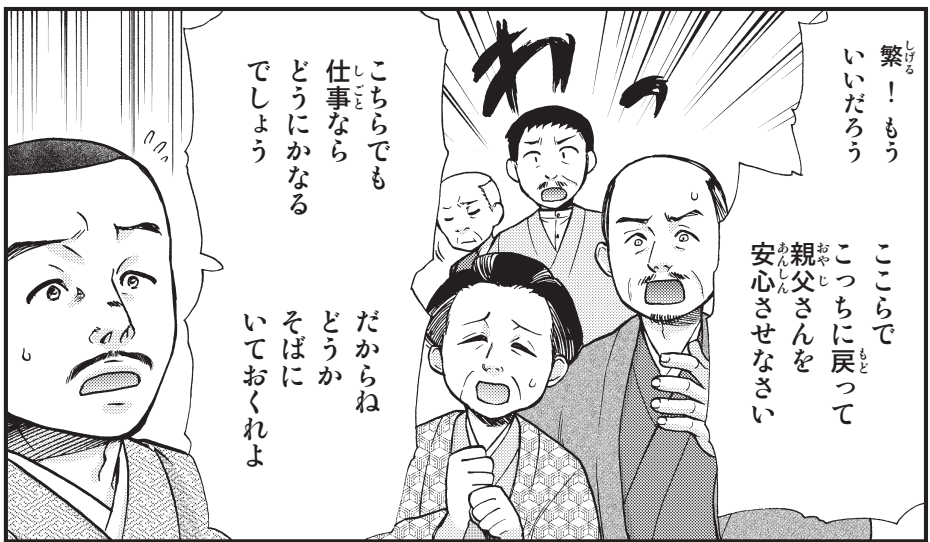




父・立威の  
病状は案じて  
いたほどの  
こともなく

牧水は  
四年ぶりに父に  
会えたことに  
安心した

しかし…

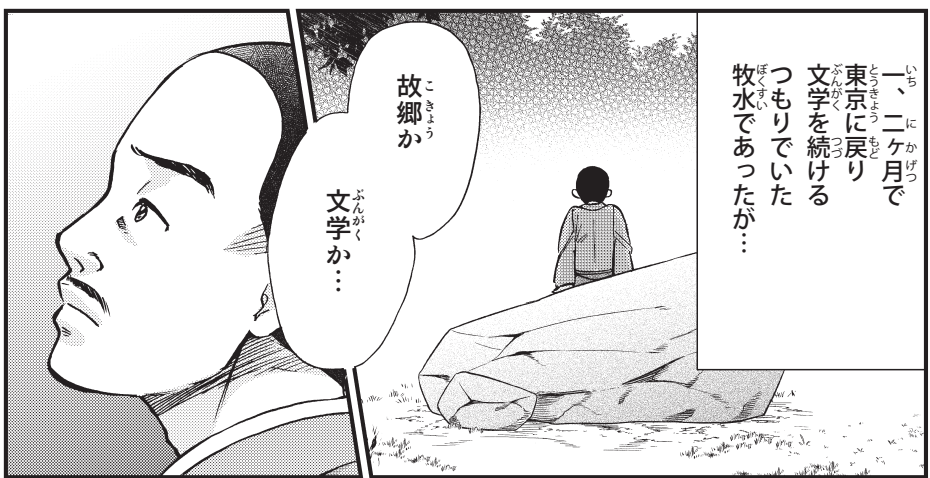


繁！もう  
いいだろう

ここらで  
こつちに戻って  
親父さんを  
安心させなさい

こちらでも  
仕事なら  
どうにかなる  
でしょう

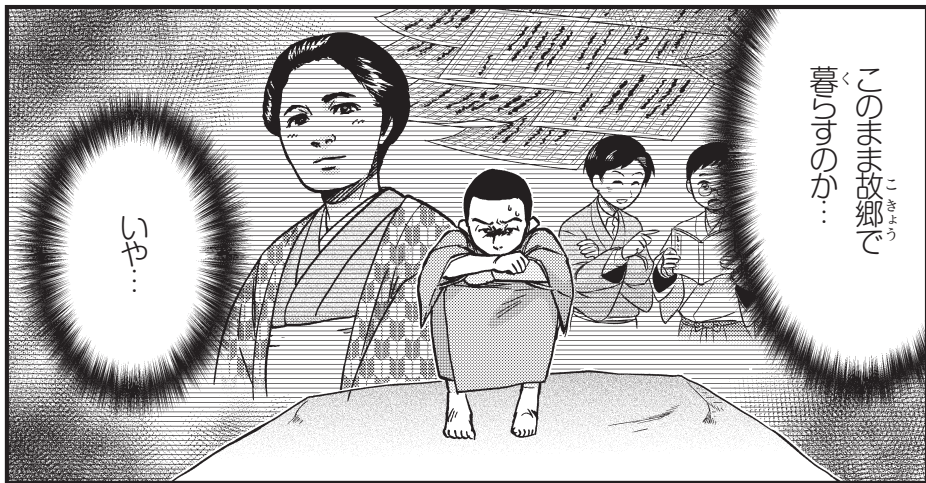
だからね  
どうか  
そばに  
いておくれよ



いち、二ヶ月で  
東京に戻り  
文学を続ける  
つもりでいた  
牧水であったが…

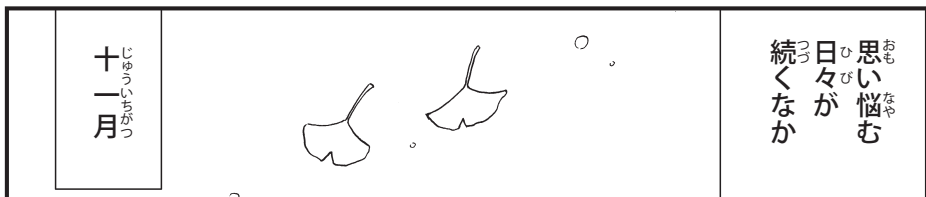
故郷か

文学か…



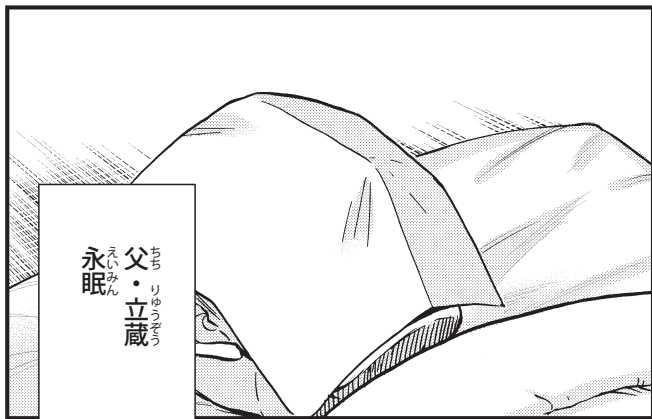
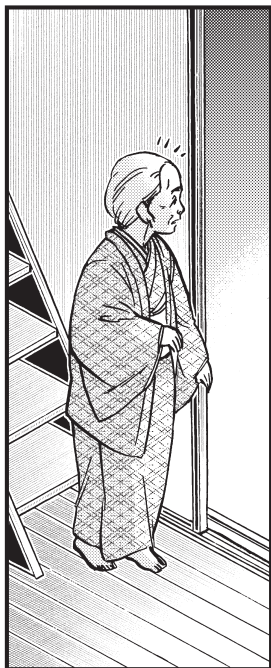
このまま故郷で暮らしますのか…

お母さん

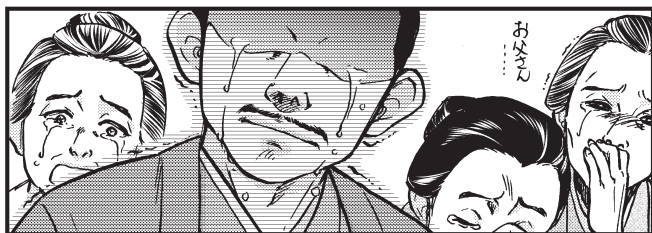


十一月

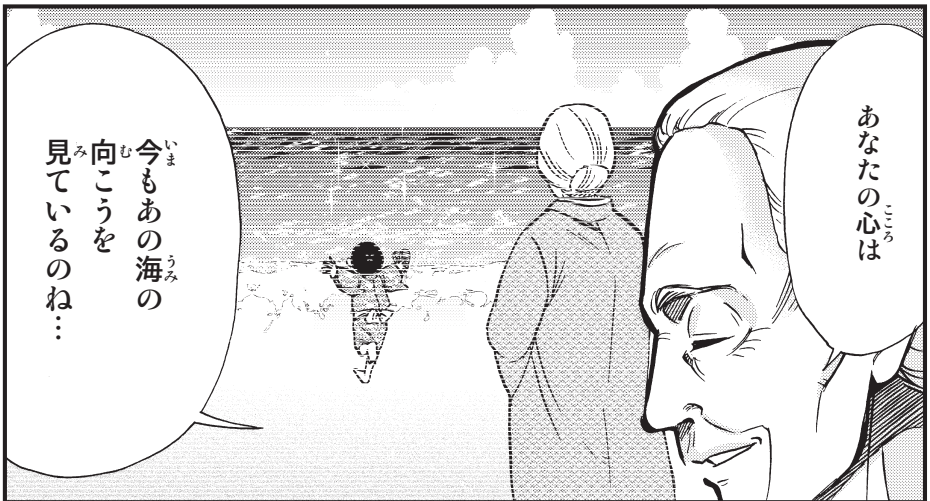
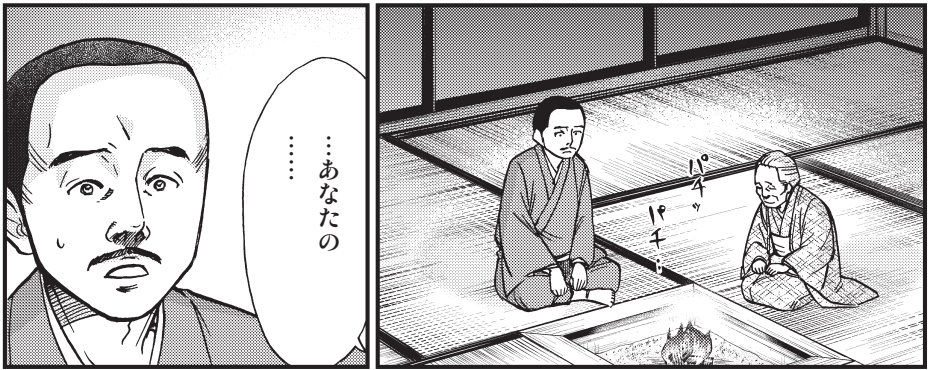
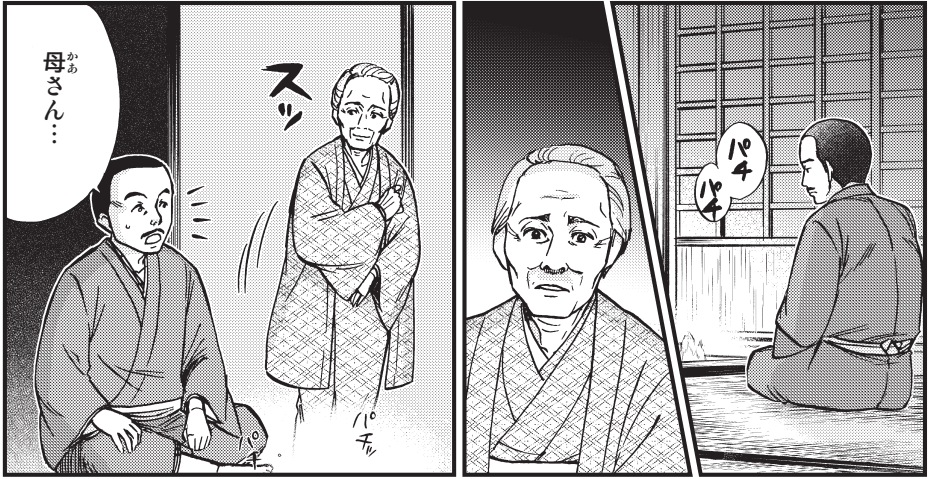
思い悩む日々が続く

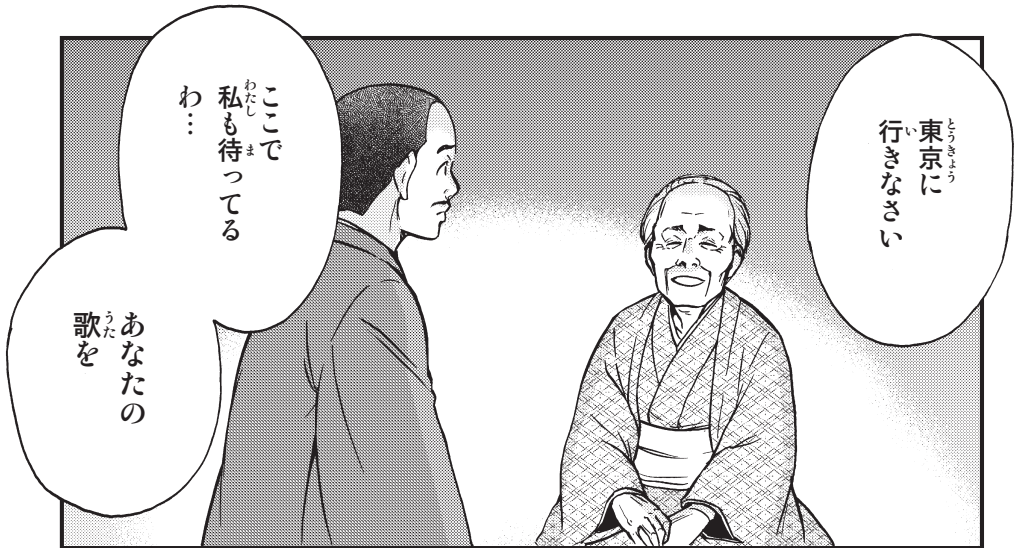


父・立蔵  
永眠



お母さん

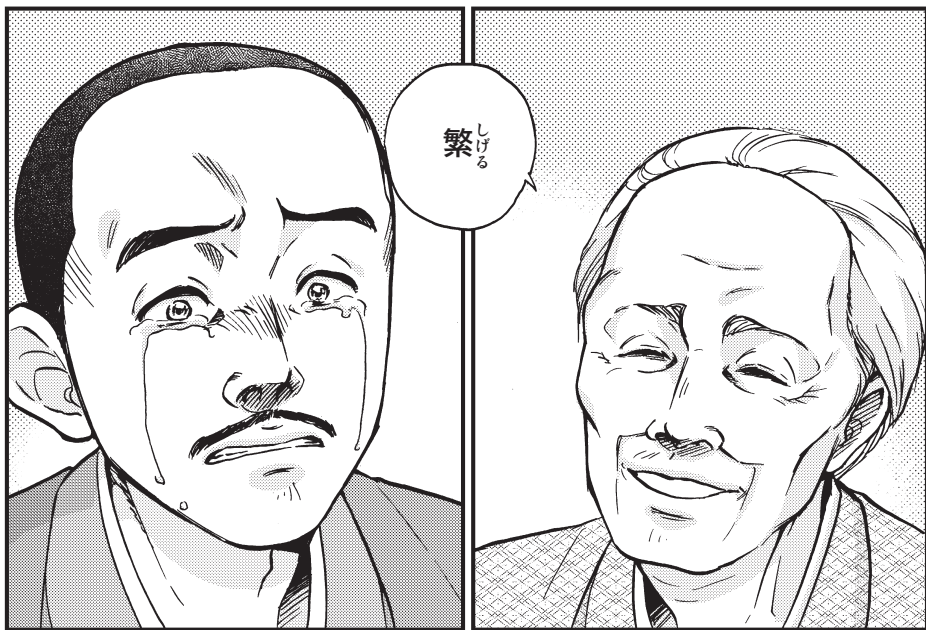




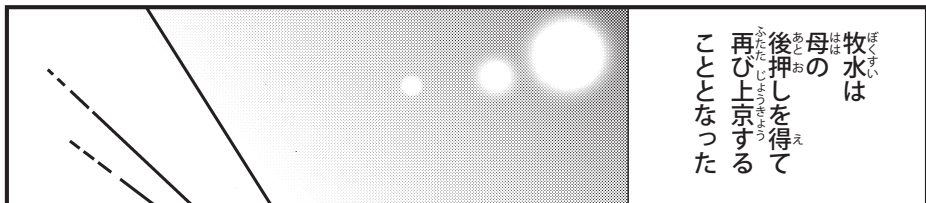
とうきょう  
東京に  
いきなさい

ここで  
わたし  
私も待ってる  
わ…

あなたの  
うた  
歌を



しげる  
繁



ぼくすい  
水は  
母の  
後押しを得て  
再び上京する  
こととなった



せんせい！  
先生！  
東北の各県から  
講演の依頼が  
講演の依頼が  
来ています

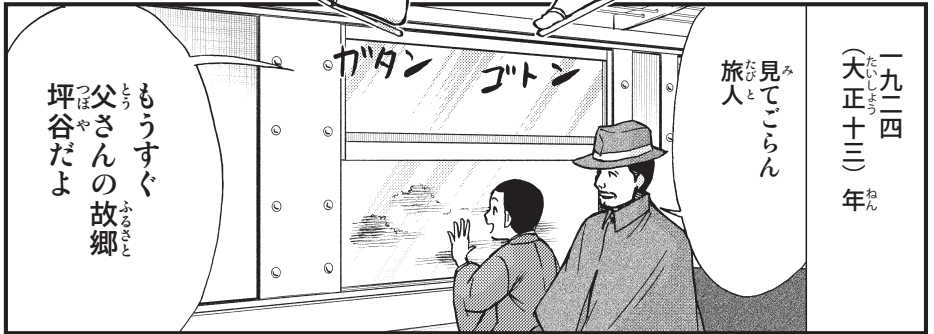
ほくすいせんせい  
牧水先生!!  
次の歌集は  
いつですか!?

その後、  
牧水は



ぜんこく  
全国を  
旅しながら  
歌を詠みつづけ

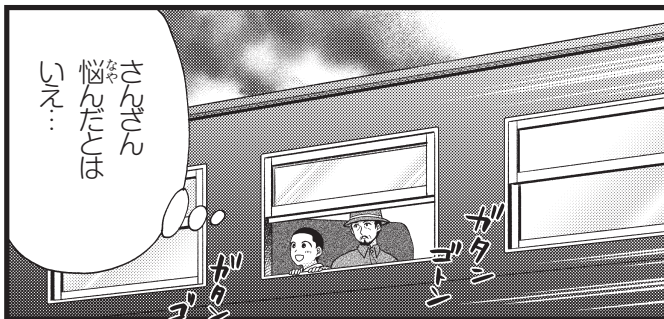
こくみんてきかじん  
国民的歌人と  
なつていった



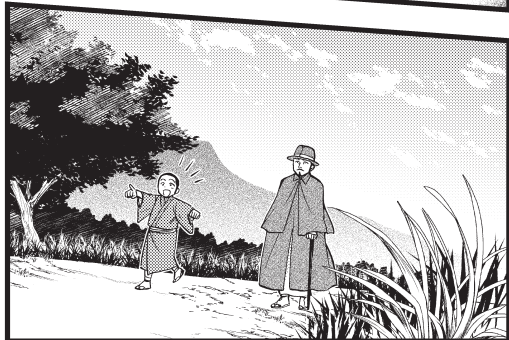
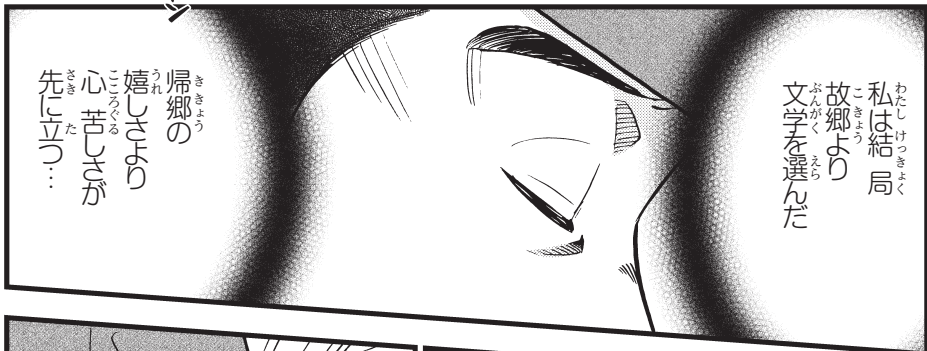
旅人 見てごらん

もうすぐ  
父さんの故郷  
坪谷だよ

一九二四  
(大正十三) 年



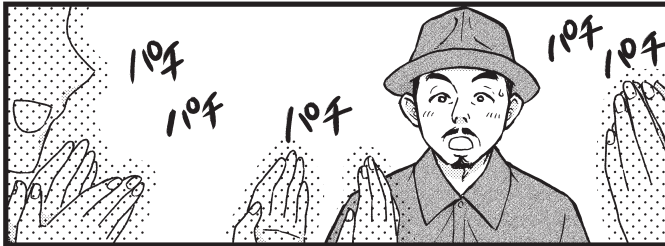
牧水は  
父・立蔵の  
十三回忌のため  
長男を連れて  
十二年振りに  
故郷に戻っていた



# わあああ

ぼくすいせんせい  
牧水先生！

おかえり  
なさい——！！



こくみんてきかじん  
国民的歌手と  
なつた  
ぼくすい こうみやう  
牧水の 高名は  
こきやう ひび  
故郷でも響き  
わた  
渡つており



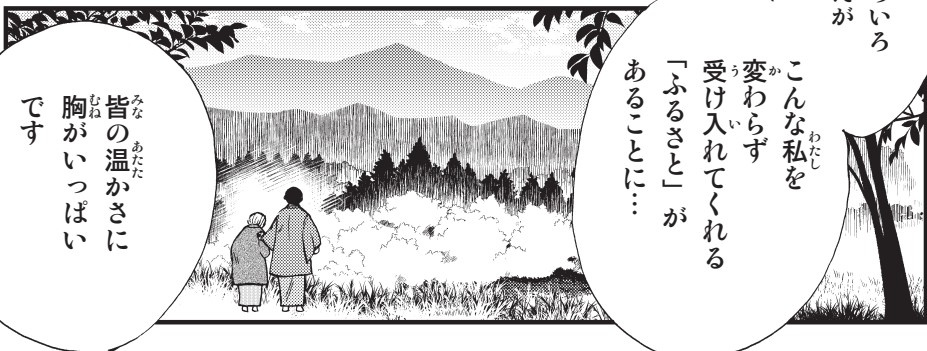
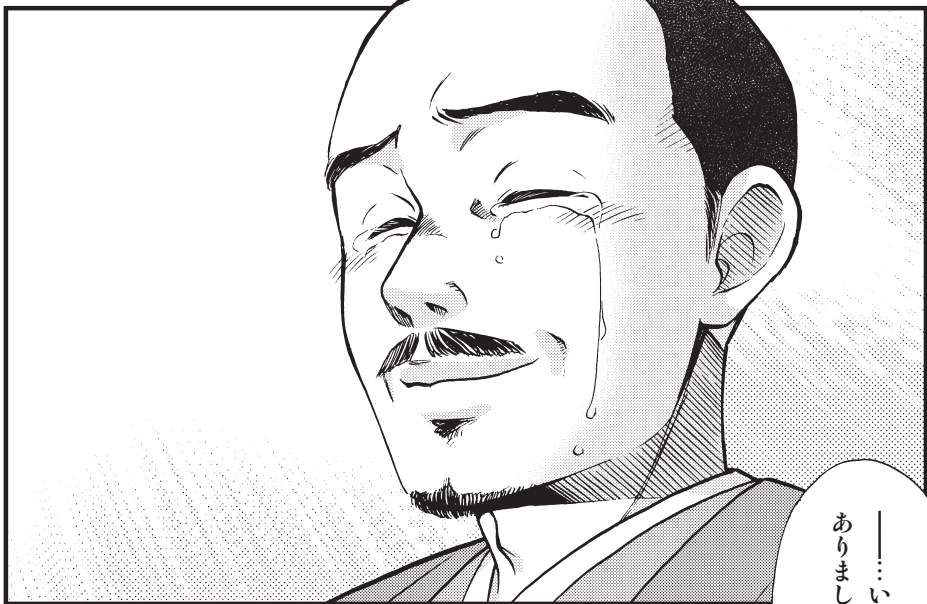
あの『みなかみ』の  
巻頭に  
なつた歌を  
歌ってください

ぼくすいせんせい  
牧水先生！

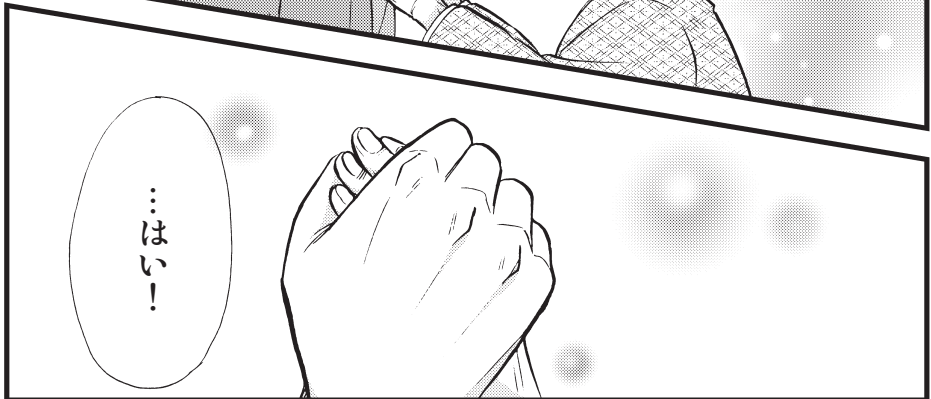
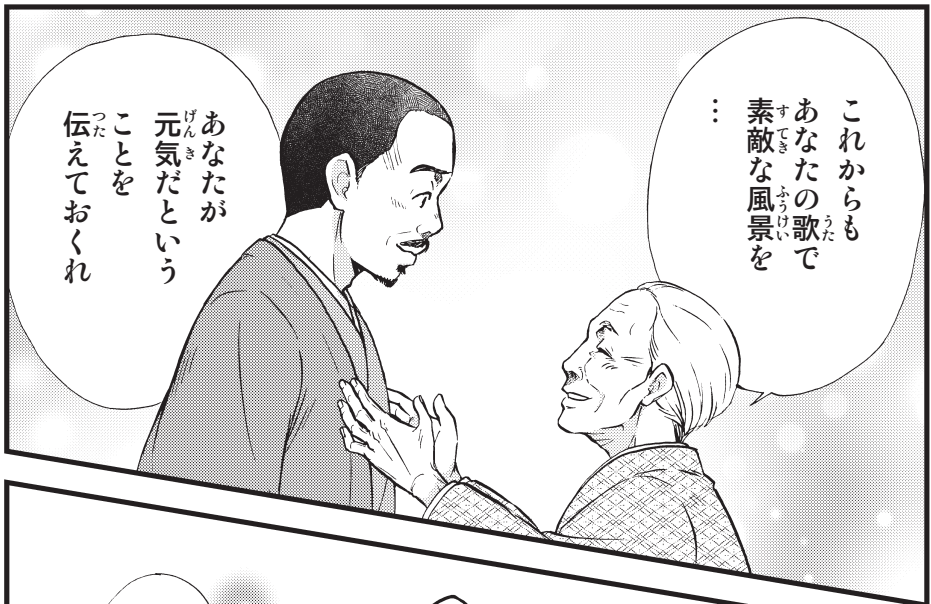


しゆえん  
酒宴を設け  
られるほどの  
だいかんたい  
大歓迎を受けた

ぼくすい  
牧水の心配を  
よそに  
行く先々で  
さまざまき







その後北海道から  
朝鮮半島まで  
あちこち旅を続け

その飾らない  
歌風と人柄で  
どこでも  
愛された牧水だったが

一九二八（昭和三）年  
四十三歳の若さで  
亡くなる



短歌をより身近で  
親しみやすくし  
後に「あくがれ」の文学と  
呼ばれることになる  
牧水の歌は

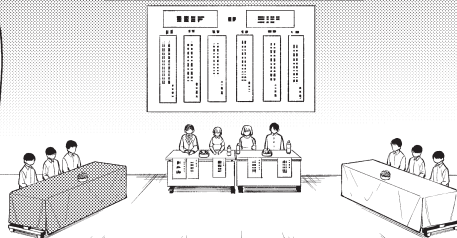
日本中で愛され  
全国に三百基を越す  
歌碑が建てられる  
こととなる



### 牧水・短歌甲子園

そして現在  
日向市では

「月の声  
あすも聴けると  
知りながら  
今日の日をまだ  
終えられずにいる」





とてもきれいな  
歌と的確な  
質問でしたね

決勝戦に  
ふさわしい  
内容だったと  
思います



牧水の詠んだ  
歌の数々は  
現代の人々にも  
愛され続け

牧水が愛した  
歌を詠む心も  
脈々と  
受け継がれている



## 旅と自然を愛した国民的歌手・若山牧水をめぐって

### 国民的歌手・牧水の人気

43歳という短い生涯のなかで、実に9,000首もの歌を残し、「国民的歌手」として人気を博した牧水でしたが、歌手としての道のりは、決して順風満帆なものではありませんでした。早稲田大学卒業と同時に出版した第一歌集『海の声』は、ほとんど売れず、困った牧水は古本屋に安く売り払ってしまいます。

詩歌雑誌の創刊を試みるも難航し、生活のために一時は新聞社に勤めます。新聞記者時代は、新鮮で臨場感あふれる記事が好評で「名文記者」として名が高まりつつありましたが、大嫌いな洋服姿での仕事と、文学活動に支障をきたすという理由などから、わずかな数カ月で退職してしまいます。新聞社退職後すぐに出版した第二歌集『独り歌へる』は、牧水の内面的な変化を味わえる、情熱的な歌集ではありませんでしたが、発行部数が200部と少ない作品でした。

しかし、第二歌集の出版から3カ月後に発刊された第三歌集、『別離』が世間の注目を

浴び、牧水は一躍歌壇の花形となります。『別離』は第一歌集、第二歌集に新作を加えたものでしたが、等身大で綴るせつない恋の歌が人々の共感を呼び、自然主義の歌人として文壇に新たな風を吹き込むことになったのです。

幼い頃から文才に秀でていた牧水でしたが、東京の学友との出会いと交流、そして私生活での苦悩が、その才能をさらに開花させ、国民的歌人への道を切り開くことにつながりました。牧水の歌は、当時の人気もさることながら、今でも短歌雑誌で愛誦歌のアンケートをとると最上位にならぶほど根強い人気を誇っています。

### 牧水が文壇に与えた影響

『われは海の声を愛す。潮青かるが見ゆるもよし見えざるもまたあしからじ、遠くちかく、断えみたえずみ、その無限の声の不安おほきわが胸にかよふとき、われはげに云ひがたき悲哀と慰藉とを覚えずんばあらず。』

牧水の第一歌集『海の声』の冒頭に書かれた自序からもわかる通り、牧水はとりわけ海を愛していました。歌人の岡野弘彦氏も「日本の和歌を中心とする千五百年の文学の伝統の上で、これほど海への情熱を若々しく自在に示した例は絶えて無かった」と称しています。牧水が海を愛した背景には、幼少の頃に母に連れられて初めて海を見た時に抱いた

「胸のときめき」があつたといいます。牧水の歌は「あくがれ」の文学と評されていますが、その原点は幼少期に海を見た時に感じた「遠い世界へのあくがれ」だったようです。この「あくがれ」の心によって、牧水は旅を愛し、行く先々で出会った無名の自然を愛して歌を綴っていきました。牧水の歌に名所旧跡が登場することは少なく、無名の自然をただただ愛した素朴な歌風は、歌壇をより身近で庶民的なものにしていきました。全国に300基を超える歌碑が建てられているのも、牧水の愛した無名の自然が、人々の共感を呼んだ結果だとも言えるでしょう。

「白鳥は哀しからずや空の青海のあをにも染まずただよふ」

空の青色にも、海の青色にも染まらず漂う、真つ白な鳥は寂しくないのでしょうか、と歌った牧水の代表的な歌です。素朴な自然の風景と、牧水の青春の寂しさを重ねたこの歌は、牧水の代表歌として今でも広く人々に愛されています。

「納戸の隅に折から一挺の大鎌あり、汝が意志をまぐるなといふが如くに」

一方で牧水は、大幅な字余りのある破調歌にも意欲的に挑戦しています。この歌には、帰郷した際に、このまま故郷に残るか、再び上京するか思い悩んでいる自分の意志の弱さを切り倒してしまいたいという、思いが投影されています。自身の苦悩を破調や口語律を取り入れて表現することで、新しい文体を創造しようとしたことは、時代の先駆けでもありました。

## 受け継がれる牧水の心

「短歌県みやざき」と呼ばれるほど短歌が盛んな宮崎県。牧水の出身地である坪谷小学校では毎朝登校時に牧水の短歌を朗詠するなど、牧水の自然と歌を愛する心の継承が行われています。毎年、日向市で開催されている短歌の全国大会「牧水・短歌甲子園」では、60チーム以上が出場し、短歌の人気を感じさせてくれます。また、この短歌甲子園で審査委員も務める歌人・俵万智氏は、宮崎県などが主催する「若山牧水賞」の第11回受賞者でもあります。この賞は、毎年短歌文学の発展に貢献した歌人を表彰するものです。牧水のふるさと坪谷では、牧水の命日9月17日に「牧水祭」を開催しており、令和4年で72回を数えました。72年間、一度も途絶えることがありません。牧水終焉の地・静岡県沼津市をはじめ、牧水ゆかりの地でも顕彰活動が行われ、その輪は全国に広がっています。



## 若山 牧水 略年譜

年号	年齢	内 容
1885	0	8月24日、東白杵郡坪谷村三番地に生まれる。
1896	11	3月、坪谷尋常小学校卒業。5月、延岡高等小学校に入学し、優れた文章家であった担任教師の影響を受ける。
1899	14	3月、宮崎県立延岡中学校（現宮崎県立延岡高等学校）の一期生として入学し寄宿舎生活。詩歌を深く愛する校長山崎氏の影響を受ける。
1901	16	2月、延岡中学校校友会誌に初めて短歌や俳句などを発表。寄宿舎を出て下宿。
1902	17	同級生らと回覧雑誌『曙』を発行。短歌専門の研究同人会（野虹会）を発足。投稿雑誌などにさかんに投稿。
1903	18	牧水の文才を認める教師から文学に専念することを勧められる。秋頃からペンネーム「牧水」を使い始める。
1904	19	3月、延岡中学校卒業。早稲田大学文学科高等予科に入学。北原白秋と出会う。
1906	21	土岐善麿、佐藤緑葉らと回覧雑誌『北斗』を発行。帰省の途中、友人の下宿先で園田小枝子と出会う。
1907	22	春、園田小枝子との交際をスタート。6月、岡山、広島など中国地方を旅行。名歌「幾山河～」はこの時詠まれる。10月、東京に永住、純文学者になることを決意する。
1908	23	7月、早稲田大学文学部英文学科卒業。同時に第一歌集『海の声』発表。文芸誌『新文学』創刊の計画を進めるが、資金難で断念。
1909	24	7月、中央新聞社に入社するが、およそ5ヶ月で退社。
1910	25	1月、第二歌集『独り歌へる』発表。雑誌『創作』の編集を開始。4月、第三歌集『別離』を発表。人気歌人となる。
1911	26	1月、創作社を興し雑誌『創作』を編集。歌人太田水穂の家で後に妻となる太田喜志子と出会う。9月、第四歌集『路上』を発表。園田小枝子との恋愛が終わる。『創作』休刊。
1912	27	4月、友人石川啄木の最期をみとる。5月、太田喜志子と結婚。7月、父允篤の知らせに帰郷。9月、第五歌集『死か芸術か』発表。11月、父立蔵永眠。ふるさとが文学が苦悩の日々が続く。
1913	28	4月、長男 旅人誕生。5月 母の許可を得て上京。9月、第六歌集『みなかみ』を発表。
1914	29	3月、『創作』誌友大会を開催。4月、第七歌集『秋風の歌』発表。
1915	30	病気の妻のため東京から神奈川県三浦半島に転居。海辺での生活が始まる。10月、第八歌集『砂丘』発表。11月長女みさき誕生。
1916	31	6月、第九歌集『朝の歌』、散文集『旅とふる郷』発表。三浦半島から東京へ戻る。
1917	32	8月、女流歌人でもあった妻 喜志子との合著第十歌集『白梅集』発表。『創作』を復刊。
1918	33	4月、次女 真木子誕生。5月、第十二歌集『渓谷集』、7月、第十一歌集『さびしき樹木』発表。散文集『海より山より』発表。
1919	34	9月、紀行文『比叡と熊野』発表。
1920	35	晩年の地として東京から静岡県沼津へ移住。
1921	36	3月、第十三歌集『くろ土』発表。4月、次男 富士人誕生。
1922	37	10月、「みなかみ紀行」として有名な旅に出る。東京、小諸草津、暮坂峠、沼田、金精峠を経て日光を回る。
1923	38	第十四歌集『山桜の歌』発表。
1924	39	3月、父の十三回忌法要の為、長男 旅人を連れて帰郷。7月、紀行文集『みなかみ紀行』発表。
1925	40	2月、随筆集『樹木とその葉』発表。10月、沼津に新居が完成。
1926	41	『詩歌時代』創刊。経営難から六号で廃刊。多額の借金返済の為、各地へ揮毫旅行へ出かける。
1927	42	5月、妻 喜志子同伴で朝鮮半島へ揮毫旅行に出かける。7月、妻とともに坪谷へ帰郷。最後の帰郷となる。
1928	43	急性腸胃炎兼肝臓硬変症にて9月17日、沼津の自宅にて永眠。